遠山記念館だより　第51号

◇◇◇ 館蔵品紹介 ◇◇◇

朝顔模様小袖裂（紅縮緬地　染）

江戸時代中期（18世紀）
97.0×31.0（㎝）

夏の草花の中で朝顔は、古くから絵画・工芸のモチーフとして使用され、さまざまな形で登場しました。着物の模様に表わされたこの朝顔もそんな好みの中に生まれたといえます。この裂をみていると、染織品という感じが希薄になって、一幅の掛軸のような気がしてきます。それは一様に上を向いて咲く朝顔と、葉を単調に陥らないように巧みに配した構図の妙であり、竹竿にしなやかに蔓を巻いて咲く花の、一つ一つが鮮やかな紅地に映えて、生き生きと可愛らしくまとめられているからでしょう。

この裂は若い女性の振袖の一部だったと考えられ、洋画家である岡田三郎助（1869-1939）の旧蔵品の中でも愛蔵の一枚です。岡田はこの裂の入手について、『時代裂』広報冊子[1]の中で回想しています。大正12年（1923）、東京の店でこの裂をみつけた岡田は購入の約束をしました。しかし数日後関東大震災に見舞われ、店は震火を免れたものの、復興のため裂類は京都のコレクターに売却されてしまいました。岡田はこの裂の美しさを忘れることができず、明日のお米の入手も不安であった当時、売却先を説得して数枚ある小袖裂の内の一枚をついに手に入れたそうです。初めて目にした時の印象や喜びを思い起こしながら、この裂を眺め暮らしたと書いています。なお、この裂を東京の店から買い取ったのは、京都の野村正治郎（古美術商・染織品蒐集家）です。野村もお気に入りの裂だったのか、この裂と共裂による「小袖屏風」（写真1）を製作しています。この屏風は現在、国立歴史民俗博物館に所蔵されています。

さて本作品の染色法は、朝顔の花とつぼみは平縫

い絞りにより防染して藍に浸染されています。藍色の濃淡と巻き皺の線が生まれ、朝顔の花の特長が効果的に表現されています。この朝顔の染色のあと、その他の部分をどのように染めたのかについては意見が分かれています。ある説は、朝顔を染め終わってから、そこを竹の皮などに包んで防染して黄色に染め、次に葉や蔓・竹を再度糊防染して地となる紅色に浸け染めし、その後、糊を落として葉や竹竿の部分に描絵を加えたとしています。またある説は、花を染めてから前者と同様に防染して、全体を紅色に浸け染めし、それから何らかの方法で、葉や竹竿・蔓の部分の色を抜いて黄色にし、そこへ描絵を加えたのではないかといいます。この裂の裏をみますと（写真2）、地色である紅色と葉の黄色部分が何らかの方法で明瞭に染め分けられていることがわかります。その美しさのあまりに、染め方も謎めいています。

岡田自身もこの裂の染色法について強い興味をいだいたらしく、使われているのが染料か顔料かなど見聞きしたことをくわしく記しています。「友禅染の事などに就きて」2) には、まず野村正治郎とこの裂について語り合っています。「野村氏はこれは友禅が發達しない以前に出来たものと考へる―それは朝顔の葉及び蔓のうち、すべて顔料で着色されてゐる。こう云ふ事はどうしても友禅斎が出た頃ではないから、それ以前であると云った。私もそれには同感して喜んで東京へ持って歸ったのである」。さらにこの裂を和田三造（洋画家）や木村雨山（染織作家）に見せたり、金子なる人物（友禅染では金沢で第一流の人）に意見を求め、かつ裂の端をほぐすことによって考察を深め、友禅染は染料ではなく顔料を呉汁で生地に固着すると記しています。そして文中では岡田の興味はさらに広がり、加賀染と琉球染にまで及びます。ここでも鎌倉芳太郎（染織作家）に意見を求め、加賀染も琉球染から来たものか、独特に京都あるいは加賀で発達したものかなどの疑問を投げかけ、鎌倉芳太郎の琉球での調査によってそうした疑問に対する何らかの確証が得られることを期待しつつ文を結んでいます。

岡田の染織品に対する関心は、色彩やデザインの美しさだけにとどまりません。その技術面についても造詣が深く、染織の歴史や技法の探究に実に熱心に取り組んでいました。

岡田は佐賀県出身で、明治30年にフランスへ留学し、外光派のラファエル・コランに師事しました。帰国後は、女性像に独特の優美さを確立し、今も多くのファンを惹きつけています。岡田が描く、女性が着ている江戸時代とおぼしき着物には、縮緬や綸子の生地の風合いを彷彿とさせ、刺繍や友禅染などの模様の描写が実にみごとです。これは、岡田の染織品に対する愛情の深さを物語っていると思われます。

（水上 嘉代子）

註
1) 岡田三郎助「晴陰朝顔模様－裂の憶ひ出 その六－」『時代裂』広報冊子 月報第15･6合併号　昭和8年4月
2) 岡田三郎助「友禅染の事などに就きて」『工藝時代』第1-1号 大正15年12月

〈参考文献〉
『特別展 岡田三郎助－エレガンス・オブ・ニッポン－』佐賀県立美術館図録 平成26年9月

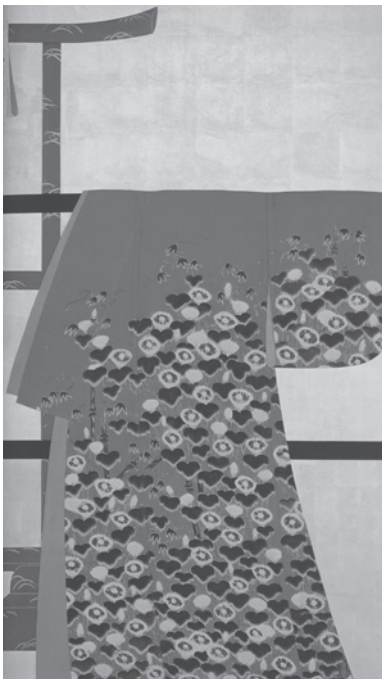


写真1. 小袖屏風（野村コレクション）右隻部分
国立歴史民俗博物館蔵

写真2. 小袖裂の裏部分

館蔵古代アンデス土器の動物表現あれこれ

井上 則子

昨年秋に当館で行った古代アンデス展では、工芸品で表現された様々な動物や鳥、作物などをご覧いただきましたが、今夏の「ガラスと土の造形」展（p.6参照）では再びアンデス文化を中心に土で表された動物等を展示する予定です。この展覧会に合わせてこの稿では当館のアンデス土器・土偶より動物や鳥、魚類を表現したものを選出し、「誌上動物園」としてご案内します。古代アンデスの人々がその多様な自然環境の下に生きる様々な命をどのような思いで写し取ったのかを思い巡らしながらごゆるりと園内をご散策ください。

1. 誇り高き猫科動物たちのゾーン

まずご案内するのは、ジャガー、ピューマのいる猫科動物ゾーンです。いずれも新大陸特有の生物ですが、ジャガーは主にアマゾン源流地帯の水辺に生息し、体毛に梅花形の斑文があるのが特徴です。チャビン（紀元前800－前500年頃）に代表される初期のアンデス文化ではジャガーを神格化した図像を持つ工芸品や建築装飾が数多く見られ、アマゾン地帯とアンデス地域とのつながりを考えさせます。

一方ピューマの活動範囲は、平地から3000m超えの高地の砂漠や湿地帯までと広く、時に人や家畜を襲います。体毛は無文です。高地やペルー太平洋岸に栄えた文化の土器や染織品には、しばしば斑文のない猫科動物が見られ、ジャガーよりも身近な生き物であるピューマを表していると考えられます。

また他の生物と合体した不思議な猫科動物もこのゾーンに生息しています。写真の右下の「猫蛇」の土製品はトランペットで、ペルー、モチェ文化(紀元後100-800年頃)のもの。尻尾の先が吹き口です。儀礼の行進の時にでも用いたのでしょうか。左下は「猫魚」でワリ文化（後700－1000年頃）の土器。ジャガー独特の斑文を中黒のある丸文で表現しています。

2. 様々に変容する蛇のゾーン

蛇は世界各地の神話や伝説で特殊な力を持つ生物として扱われてきましたが、古代アンデス文化でも蛇にまつわる言い伝えや思想があったのでしょう、様々な時代の土器にその姿が見られます。写真中央後ろはペルー北部のビクス文化（紀元前500－後500年頃）の壺。把手付の細長い口に紐状の蛇がぐるぐる巻き付いています。先にも一匹紹介しましたが、猫科動物と合体した、あるいは猫特有の牙を持つ蛇は多く、他の3点の土器は皆その系統の生き物です。

手前の橋形注口（ペルー南部の土器に多い注口）を付けた双頭の蛇（パラカス文化 紀元前500－前200年頃）の口にもチャビン以来の猫科動物神の特徴のひとつである牙が見られます。この土器は注口の反対側に鳥頭が付いていますが、頭頂部に小穴があり、注口から息を吹き込むとピーと鳴る仕組みになっています。

3. 今年の干支にちなんだ猿ゾーン

古代アンデスに十二支があったわけではありませんが、やはり今年の干支である猿を外すわけにはまいりません。

サルは古代アンデスでも大変親しまれた動物であったようで、様々な時代で工芸品のモチーフとなっています。写真では左からナスカ（前200－後500年頃）の把手付壺、ビクスの双胴壺2点、チムー（後

1100－1470年頃）の把手付壺をご覧いただいていますが、特に、じゃれあう2頭の猿を象ったビクスの土器には製作者の猿への暖かい眼差しすら感じられます。この土器と、左の猿頭付の土器の注口にも笛が仕組まれています。

ナスカの土器に描かれた猿は少々異色で、一応猿らしい長い尻尾があるのでこのゾーンに加えましたが、片方の手には槍を、もう片方には切り取られた人間の首を握っています。ナスカ特有の頭飾り、口髭（ひげ）、背中のたてがみ（？）からも只者（猿）ではない様子が感じられます。

右の土器では注口の根元に小さな猿がいます。鳥やサル、蛙などの小像をワンポイントとして用いるのはチムー文化の土器に良く見られる特徴のひとつです。

4. 華麗なる鳥たちのゾーン

西に太平洋を縁取るように続く砂漠、中央に6000m級の峰々が連なる山脈、その東方にはアマゾン源流地帯の熱帯雨林低地が続く南米アンデス地帯。ここには世界中の気候帯があるといわれますが、鳥類の種類の多さはそれをよく物語っています。土器にも多種多様な鳥が見られ、アンデス工芸の中で最も多く表現される生き物といっていいかもしれません。当館にも多数の鳥文や鳥形の土器がありまして、とてもこの枠には収まりませんので選抜メンバーでご紹介いたします。

ここにいるのはペンギン（フンボルトペンギン）、その右に首の長い水鳥が２羽、羽繕いをしています。

ペンギンの左は右脚で木の実を持つオオム、そしてオオハシの仲間のエメラルド・トゥカンと思われる鳥、その右の２つの深鉢にはそれぞれ芋虫をくわえるハチドリと花をくわえる種類不詳の鳥が描かれています。

さらに右にはサボテンに止まった鳥がいますが、目や胸毛、風切り羽などの模様から猛禽の仲間と考えられます。その右はバリケンに似たカモかアヒルの仲間のようで、そしてその後ろは…着ぐるみではありません、梟（ふくろう）と人間の合体生物です。モチェ文化の土器で、当館では鳥神形土器としていますが、失われた伝説に登場する不思議な生き物なのかもしれません。

5. 一番人気のリャマ（またはアルパカ）園

アンデスの動物といってまず思い浮かぶのは近年日本でもブームとなったアルパカではないでしょうか。

リャマとアルパカとは同じ南米の、主に高地に生息するラクダ科動物で、見かけもアルパカと良く似ています。ラクダ科動物の飼育の歴史は古く、紀元前3000年には開始されていたと考えられています。

インカ時代の儀礼用の動物像には明らかにアルパカの長毛品種を象（かたど）ったとわかるものもありますが、当館の土器、特に写真右2点のチムー文化の土器ではいまひとつ判然としません。右端は2つのリャマの頭部をくっつけた形で、尖端は失われていますがペルー北部海岸地方の土器に良くみられる鐙形（あぶみがた）の注口が付いています。アルパカはその柔らかい毛が織物に用いられ、一方リャマは主に荷駄獣として飼育されてきました。またリャマは、その肉は食用に、糞は燃料になり、そして儀礼の際に生贄（いけにえ）として神に奉げられた大切な生き物でした。写真の一番小さな土偶は、その左の土偶とともにチャンカイ文化で作られたもの。遺跡から多数出土し、中には頭部を色鮮やかな糸で飾られたリャマも見つかっています。家畜の繁殖儀礼で用いられたと考えられます。

6.「美味しい系の魚介」が多い水族館

ペルー沖は世界有数の豊かな漁場として知られていますが、これらの土器をみると、そのことが良くわかります。南極海からチリからペルー、エクアドル沖を流れるペルー海流（別名：フンボルト海流

寒流）は、豊富なプランクトンを運びながら赤道付近から南下する暖流とぶつかり様々な魚介類を集めています。また、ティティカカ湖に代表される湖沼や河川の魚も古来食用とされてきました。この水槽の中は紙面の都合上、海の魚も淡水魚も同居しています。

写真の中央上の壺には大きな目玉と口ひげを持つムカデのような生き物が描かれています。蛇のようにも見えますが、ナマズの仲間リーフェという淡水魚です。油を引いて蒸し焼きにするとおいしいようです。パラカスの土器で、ネガティブ彩文という染物のろうけつ染めに似た技法で絵を描いています。これは焼成前に器の蠟（ろう）状の液体などを塗って模様を描き、黒い顔料を施して焼くと蠟が溶けて素地が現れ抜文様となる技法です※。

その直下にあるナスカ文化の白地の鉢にはカツオのような魚が2匹丁寧に描かれています。背中は黒く腹の部分は上の魚は黄土色、下の魚は赤褐色。丸い目の横から伸びる白い線に特徴があります。その左下はウミギク貝という二枚貝を模したモチェ文化の杖頭です。この貝はエクアドル以北の暖かい海に生息し、ペルー以南地域へは交易品としてもたらされた貴重な貝で、そのまま儀礼や埋葬品として、あるいはビーズなどの装飾品に加工されるなどして用いられました。右上端の土器の注口の付け根にみられる巻貝はイモ貝で、やはりエクアドルの海から運ばれ大切に扱われていました。

魚文の鉢の右隣2つの壺はチムー文化の海老形の黒色土器です。かなり省略されていますが、頭部の下方に細く小さなハサミがあります。おそらく川に住むカマロンと呼ばれるテナガエビを表現したのでしょう。カマロンは今でもペルー料理で人気のある食材でフライやスープ、和え物など様々な料理に用いられています。

※蠟でなく粘土で模様を表し、燻（いぶ）して黒くしたあと粘土を剥（は）がして行う、という説もあります。

7. グロかわいい蛙・トカゲゾーン

ここには蛙とトカゲ（イグアナか）を表現した土器を集めてみました。右上はモチェ文化の、白地赤彩で描かかれたトカゲ。鐙型注口の付け根の中心から放射状に貼りつけた紐で器面を8つに区切り、それぞれに頭を上にしたトカゲを描いています。あとの３つは蛙です。左下はモチェ文化の土器でパンパンに膨らんだ姿なので、もしかすると卵がお腹にあるメス蛙なのかもしれません。

右下はイボのある少々醜い顔をした蛙形の土器、中央は鐙形注口の部分に4匹の小さな蛙が行進している土器でいずれもチムー文化のもの。イボ蛙の左後脚のあたりには浮彫で植物が表され、水辺の叢に座っているようにも見えます。蛙といえば雨。雨季と乾季を繰り返す気候のもと、古代アンデス地域の人々にとっては待望の雨を知らせる生物として親しまれていたのかもしれません。

8. 毛のない犬

最後は古代アンデスの人々に飼われていた犬たちがお見送りいたします。いずれもチムー文化の黒色土器で、顔や体に皺（しわ）がある南米原産の無毛犬を表現しています。

今夏の展覧会ではこれらの生き物を表現した古代アンデス土器も多数ご覧いただく予定です。皆様にお目にかかるのを楽しみにしております。

ガラスと土の造形

2016年７月２日（土）～９月25日（日）

①

オリエントとアンデスの古代文化の土器・土偶や中国、日本の陶器と、エジプトやイランの古代ガラス、西洋のステンドグラスなどの作品を併せて展示します。

柔らかな質感の土ものと、涼やかなガラスの輝きの競演をお楽しみください！

②

［主な出品作品］

①黒楽銀彩猫手焙（てあぶり）　仁阿弥道八作　江戸時代（19世紀）

②紋章・グロテスク文様エナメル彩ステンドグラス　ヨーロッパ 19世紀頃か

その他：彩画鳥形注口壺　ペルー ナスカ文化（前200－後500年頃）、幾何文様嘴形（くちばしがた）注口水注 トルコ 先ヒッタイト時代（前2000年頃）、志野宝珠香合および備前平鉢　日本 桃山時代（16－17世紀）、魚蓮花文様青釉ファイアンス皿　エジプト新王国時代 第18王朝（前1570－前1314年頃）、吹きガラス香油瓶 東地中海域（前1－後8世紀）、円文様カットガラス碗 イラン ササン朝（6－7世紀）　花文様三彩釉刻文鉢　イラン（9－10世紀）ほか

茶と花―座敷飾りの美術―

2016年10月１日（土）～11月30日（水）

茶道・華道は、いずれも室町時代にはじまった芸道であり、茶道具では釜や茶碗、華道では花生など、様々な工芸品を用います。時代ごとの美意識から選び出された名品は宝物となり、中には大名家の家宝として伝えられてきた場合もあります。こうした座敷を飾る道具も、大正期から昭和にかけては「美術」という視点から再評価され、美術館に展示されるようになりました。今回は「茶と花」と題し、遠山記念館で所蔵する座敷飾りの道具類をご紹介します。

伊賀焼耳付花生　16-17世紀

古瀬戸丸水指　16世紀

【土曜講座】
日時：10月８日（土）午後１：30～３：00
題：「美術から見る芸道の世界」
定員：80名（先着順、事前予約不要）
講座料：無料（別途入館料）
担当：依田 徹（学芸員）

【記念茶会】
日時：11月６日（日）午前10：30～午後３：00
会場：遠山邸２階座敷
席料：500円（別途入館料）
定員：100名程度（先着順、事前予約不要）
呈茶：埼玉県茶道協会

竹岡雄二　台座から空間へ

遠山邸にて開催

2016年７月９日（土）～９月４日（日）

作品を「つくること」ではなく、「見せること」に視点を置くならば、果たして芸術はどのように浮かび上がってくるのでしょうか。この問いをめぐって制作を続けてきたのが、国際的な舞台で活躍するドイツ在住の美術家、竹岡雄二（1946年～）です。彫刻を学んだ竹岡は、作品を「見せる」際に必要となる台座の存在に注目し、「台座彫刻」と呼ばれる作品群を発表します。さらにその関心を展示される空間・場所・環境へと拡げ、制作を続けてきました。

このたび遠山記念館では、埼玉県立近代美術館と共同で、竹岡雄二の芸術を大規模に紹介する展覧会を開催いたします。埼玉県立近代美術館では、約30年間のドイツでの活動を20点あまりの代表作で振り返ります。

遠山記念館では、遠山邸の和風建築を舞台に、6点の作品を展示します。さらに「見せる」という観点から、竹岡が独自のコンセプトで遠山記念館所蔵の伝統的な美術品を選び、埼玉県立近代美術館において展示を行います。これまでの活動を回顧するだけでなく、作者が新たな試みに挑む展覧会です。

《ルートヴィッヒ・ヴィトゲンシュタインの台座》
2015年／作家蔵／撮影：椎木 静寧

主催：竹岡雄二展実行委員会、埼玉県立近代美術館、公益財団法人遠山記念館

助成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団、公益財団法人朝日新聞文化財団、公益財団法人花王芸術・科学財団、芸術文化振興基金

協力：ワコウ・ワークス・オブ・アート、JR東日本大宮支社、FMNACK５

■竹岡展イベント

アーティスト・トーク「台座から空間へ」
７月10日（日）午後１：30～２：30／遠山邸内／無料（別途入館料）

竹岡雄二氏と共に、遠山邸を歩くイベントです。実際に作品と空間を見ながら、今回の展示についてお話しいただきます。

竹岡雄二展は、埼玉県立近代美術館との２館共同開催です。遠山邸での展示と、ぜひ見比べてみてください。遠山記念館の半券による割引もあります。

《七つの台座》2011年
Photograph by Achim Kukulies, Düsseldorf
※この作品は埼玉県立近代美術館に出品されます

埼玉県立近代美術館

〒330-0061さいたま市浦和区常盤9-30-1
Tel. 048-824-0111
JR京浜東北線北浦和駅西口より徒歩3分
（北浦和公園内）
http://www.pref.spec.ed.jp/momas/

観覧料
一般1000円（800円）、大高生800円（640円）
※（　）内は20名以上の団体料金。中学生以下、障害者手帳をお持ちの方（付き添いの方1名を含む）は無料です。※併せてMOMASコレクション（1F展示室）もご覧いただけます。

■埼玉県立近代美術館と遠山記念館の“タケオカ割”

埼玉県立近代美術館と遠山記念館の「竹岡雄二」展を両方観覧すると、2会場目の観覧料が2割引になります。2会場目の観覧券購入の際に、1会場目の半券をご提示ください。
※他の割引と併用はできません。

ゆかたの着つけ教室

日時：2016年７月16日（土）午後１：00～

自分で着つけができたら、ゆかたのおしゃれはもっと身近になります。

初心者の着つけと帯結びをご紹介します。ご参加をお待ちしております。

※ゆかたはこちらで用意いたします（ 詳しくは、当館へお問い合わせください）。

定員：10名（先着順）　**締め切り日**：７月10日（日）　**会場**：遠山邸２階座敷

入館料のみ　**お申込み**：TEL 049-297-0007

お座敷美術講座

昨年に引き継き、第７回目のお座敷美術講座を開催いたします。美術館のガラスケース越しでの鑑賞では味わえない作品の魅力を感じていただける、とても贅沢な講座です。時間は約1時間を予定しています。

日時：2016年９月17日（土）　午後1：30～２：30

題：「茶席で見よう！志野茶碗」　**担当**：井上 則子（学芸員）

離れ茶室で呈茶をお楽しみいただいた後、遠山邸西棟の茶室にて桃山時代に製作された志野の２つの茶碗を鑑賞します。

定員：12名（先着順）

参加費：500円（別途入館料）　**お申込み**：TEL 049-297-0007

暮らしと建築の美　遠山邸研究会第13回講演会

日時：2016年９月24日（土）　午後1：30～3：00

題　：「伝統の畳と遠山邸の表替えについて」

講師：岡田 暁夫 氏（岡田本店社長）

会場：遠山邸大広間　参加自由、入館料のみ

5年前に遠山邸の200畳分の表替えを依頼して、1ヶ月余りで青畳の新御殿変身を実現してくれた川越の畳店の老舗 岡田本店の岡田暁夫氏に、畳の歴史と畳の出来るまでの話、匠の技をうかがいます。さらに、遠山邸の作業で畳床裏から発見された創建時の畳店屋号貼り紙、大広間床の間の4尺巾もの龍鬚畳（りゅうびんたたみ）が中継ぎという特別仕立てになっていたことも紹介してくださいます。意外と知らない畳の秘密を知る機会です。是非ご参加ください。

遠山記念館でお香会

日時：2016年10月23日（日）

国の登録文化財 遠山邸で安藤家御家流香道をいたします。徳川譜代大名安藤対馬守家に伝わる香道・安藤家御家流は、東福門院を尊祖とする、最も古式を守った流儀です。

江戸時代徳川家にまつわる名香も聞いて頂くことができる知る人ぞ知る香道として楽しんで頂いております。

秋の一日に江戸大名奥向きで大きく花を咲かせた香道を体験しませんか。

①午前11：00～午後12：30

②午後１：30～３：00

①、或いは②のどちらかの回をお選びください。

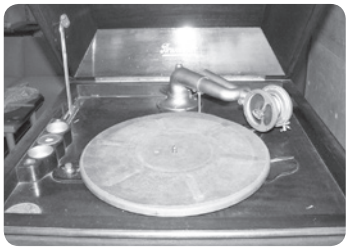
参加費：3,000円（別途入館料）　**定員**：各回10名（先着順）

会場：遠山邸２階座敷

お申込み：
安藤家御家流白百合会
板橋 陽子
yangzi_b@jcom.home.ne.jp
TEL 090-7848-4298

● レトロな空間で、ノスタルジックな音楽を

手回し蓄音機によるSPレコード鑑賞会 Part 19



日時：2016年11月３日（木･祝）午後1：30～2：30

会場：遠山邸大広間　**定員**：50名（先着順）　入館料のみ

和風建築の技術の粋を集めて昭和初期に建てられた、遠山邸の大広間で、今ではほとんど忘れ去られてしまったSPレコードの鑑賞会part19を行います。SPレコードは、エジソンが蝋管式のレコードを発明してから、大量生産に向く円盤型になって、音楽を記録する唯一のメディアとして一世を風靡しましたが、割れやすく、記録できる音域も時間も限られ、やがてLPレコードの出現によって姿を消しました。しかしながら、当時の名演奏家･名指揮者の演奏は、SPレコードでしか聴くことはできません。貴重な記録の中から、クラシック曲からはテノールのエンリコ・カルーソーなど伝説的な歌手の歌声や童謡・唱歌などを聴く予定です。電気を一切使わず再生されるノスタルジックな音をお楽しみください。

なお、ご自宅に、SPレコードをお持ちの方は、当日お持ち頂ければ、飛び入り再生も受け付けます。

昨年度の催事報告

特別展「清水比庵－温かき歌人のまなざし－」関連

2015年４月19日（日）　講演会「祖父 比庵を語る」講師：清水 固（かたし） 氏

清水固氏

「賑やかな器・物語る布―古代アンデス工芸への旅」展関連

2015年10月18日（日）　フォルクローレコンサート

演奏：慶應義塾大学ラテンアメリカ音楽研究会

2015年10月31日（土）

講演会「生命の虹―アンデス・シャーマニズムの世界―」

講師：実松 克義氏（立教大学名誉教授）

2015年11月21日（土）

講演会「古代人の心と暮らしの拠り所、神殿遺跡を探す、掘る。」

講師：鶴見 英成氏（東京大学総合研究博物館助教）

実松克義氏

鶴見英成氏

「雛の世界―日本人形の美と系譜―」展関連

2016年２月６日（土）

親子で楽しむワークショップ＆ギャラリートーク「投扇興遊びと展示解説」

（共催 川島町教育委員会「地域子ども教室　三保谷っ子くらぶ」）

2016年２月13日（土）

親子で楽しむワークショップ＆ギャラリートーク「投扇興遊びと展示解説」

（共催 川島町教育委員会「地域子ども教室　伊草っ子くらぶ」）

2016年２月20日（土）　ご当地グルメとコラボレーション！

古今雛　遠山邸2階での特別展示と郷土料理「かわじま呉汁」を楽しむ会

2016年２月26日（金）～２月28日（日）　３月１日（火）～３月３日（木）

「雛祭りの日」ガイドツアー　毎日2回開催　「雛の世界」展と遠山邸の解説案内

慶應義塾大学
ラテンアメリカ音楽研究会

その他

2015年５月３日（日）・11月３日（火･祝）　手回し蓄音機によるSPレコード鑑賞会 Part 16、17

2015年５月５日（火･祝）・９月22日（火･祝）　登録文化財のお茶室でお抹茶を

2015年６月27日（土）　第７回ゆかたの着付け教室

2015年６月13日（土）　第５回お座敷美術講座　「御所解模様を味わう―武家女性の小袖の文芸意匠―」

2015年10月11日（日）　第６回お座敷美術講座　「陰翳礼賛を体感する―床の間の陰翳と金屏風の耀やき―」

2015年11月29日（日）　遠山記念館でお香会

2016年２月７日（日）　遠山記念館でお香会

2016年２月28日（日）　登録文化財のお茶室でお抹茶を

2016年３月12日（土）　ふるさと歴史講座　「投扇興体験と遠山記念館見学」（共催　川島町教育委員会）

投扇興を楽しむ会　毎月1回 開催　計12回開催

平成27年度 新収蔵品

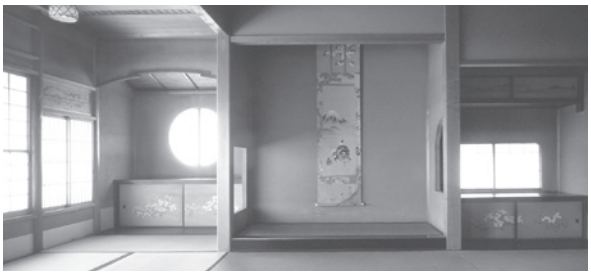
つぎの作品のご寄贈をいただき、ありがとうございました。ご紹介申し上げます。

①岡澤 孝雄様
（石川県金沢市）
現代グアテマラ
民族衣装12点
（写真）男性用花・鋸歯（きょし）
文様刺繍入毛織上衣
ソロマ　チェフ族
20世紀

②一柳 やすか様
（東京都三鷹市）
市松人形２点
（女児・男児）
川上南甫作
昭和時代

遠山邸２階の特別公開日のお知らせ

中棟２階の洋間の応接室と寝室、数寄屋座敷の秋の公開は **9月10日（土）、10月10日（月・祝）、11月5日（土）午前11:00～午後3:00まで**です。



遠山記念館だよりの判型変更のお知らせ

いつも遠山記念館だよりをご覧いただき、ありがとうございます。お陰様で５１号となりました。これを機会に判型をA4に変更しました。引き続き、よろしくお願いいたします。

利　用　案　内

◇入館料　大人700円　　学生500円
中学生以下は無料
（団体20名以上は２割引となります）

◇開　館　午前10:00～午後4:30
（入館は4：00まで）

◇休　館　月曜日（祝日の場合は開館、翌火曜日）
７/８、年末年始

◇美術館のみ展示替え休館
６/28～７/１、９/27～30、
12/１～20
邸宅はご覧になれます。

◇詳しい展覧会情報は下記でご覧いただけます。
URL http://www.e-kinenkan.com

電車・バスでのご来館の場合
- 東武東上線・JR埼京線　川越駅　●西武新宿線　本川越駅　●JR高崎線　桶川駅
  いずれも「川越駅－桶川駅」間の東武バスで牛ヶ谷戸下車、徒歩15分

お車でのご来館の場合
- 圏央道川島ICより7分
- 川越方面から国道254号線の宮元町交差点を川島方面へ右折、釘無橋を渡り最初の信号を左折、案内板に従って約10分

遠山記念館だより　第51号
2016年6月 発行
〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675
編集発行　公益財団法人遠山記念館
編集担当　水上 嘉代子
TEL 049-297-0007
FAX 049-297-6951